六根清淨大救圖會

中

特別
イ4
3163
172(2)

W
14
3163
1726(2)

六根清浄大祓圖會卷之中

摂都　蓬室有常　編述

清浄無假穢

○清と斗六根の總稱にて六根の清淨を祓ふと祝ふ身體ともに淸淨なるの二ツの本の主を守ること祓の根源なり又開運淸淨なるの意なり

と云ふ事是祓の源ふかうして天心不動の地位より出ば禊ても祓ても及ばざること祓よ新の深ざうや日月の權主を照らし玉ふ日月活機なるが如く本々人欲の汚穢も私心人欲の汚穢を祓ふと雖も今神道の教ふ

よつて種をまける時ハ忽ち晴て明く暗くなる日月を得ざる為しされバ是を
於りまんや爰に続く國摩町といふ所辺に住る平八といふ者あり
てまはびき世を送る為今の吉原郭の傍の借り御鋪を出し鋪をあきなひ
古器類なんどハ寶暦八年八月のあらましを買取し古の中にて後
の今は此上を抄して是をつくづく渡りて非なるの富は義むべからずと
取りて懐を掩ひて長息し商人のなる利を貪りて飯事なれば非なり
富なり今までも知らさずして況や先で悟りて胸中我の明ならなりそれ
先へしとあん今までは人を欺きてなる利を貪るふとなりされバ天罰の程も
おそろしまでく人の売るる物をバ捨しまして其の関破りを大いにくそ僕を悟されバ
為し実をもって人よ売る是ハ換失なるとかくし世に稼ぐる物の書に吹個し十倍

二十倍の利を得られいとて織物商を始め
始には能書人を欺くことを知るとも十分の
一とならて世を渡らんハいふもさらの事ながら
さらバとて速に御鋪を止めれば母も妻も
大に悦びこれ程見るに堪へつるやと関
是非なりて店を改め得る今までの此覚悟を
かくるからば肌寒きすなりとて外の
商売を営みるとぞ儒仏氏が其せる
著子ほのなんぞかかる教へも悉に神
儒仏の三教より流れ出て過ぎ今川の

垢を除て中心の清きを悟りハ実に六根具の境界あらぬ也故に其神明
の中心ハ浄くして穢るゝ事なく人欲の浮雲におほはるとも神明の
御旨を以てかきりけちらひされバ水底の月影形と光を発すること鏡のことくなりや
然るに六根清浄の法務を唱へ文くもすと味ひ八坂瓊の曲玉のことく五體も
此ハ是を清浄ならしむる穢れなき所といふべし

取説不可得

此文ハ本心の微妙清浄なることを不可説不可得といふ事にて言葉にハ含み
あらはしかたしとの意也上古に六根の名理を中心によくよく合點するを
要とせよとの意なり人ハ昔藤原の千方といふ者ハ天智天皇の御宇にこの
千方四つの鬼を従へ所謂金鬼風鬼水鬼隠形鬼の四鬼なり伊賀伊勢の

間に在て王命に順ハず是によりて紀の友雄に勅して千方を討しむ乃ち紀朝臣
歌を詠じて是に送る草も木も我大君の国なれバいづくか鬼のすみかなる
べきと此鬼ども是を讀て感じて散りうせけれバ千方勢を失ひて友雄終に
これを討滅せしとぞ又小野小町雨乞の歌を詠じて雨を降せしたぐひ
古今和歌にかぞへかたし古今集の序にも人のこゝろを種としてよみ出せるの
うたハ目に見えぬ鬼神をもあはれとおもはせ又ちからをも入ずして天地を動かし
これ男女の中をも和らげ極清浄の陽気を発することのこゝろハおのれが
心をこめて詠るものなれバ言葉も清浄なるべければ穢をも去べし
此くのごとく心を入れて尋ねなバ浄き天の尊の色にそむかんや
然し穢ある念を以て自然と神明の心にかなふべし

皆從口業生

此文之彼口緣初生之
一人之生一人運之經
死報之後業如影
一人迷門起
諸人之苦
一人修善
諸人之福
不圖起而求之
時來運轉
果子出矣

この害のごとくなり
集りて生死を受けるなり
死とは魂を抜て丸ド
仕る中にて
後世を補ふ
果なくなること

罪穢をも祓ひ給ふ事の尊きを説き給ふ

狩野永雲 地蔵の国 お社おろそまをを図

我身 波 則六根清浄 奈利

罪穢と云ふ事を説き給ふ ○我即ち六根清浄なり

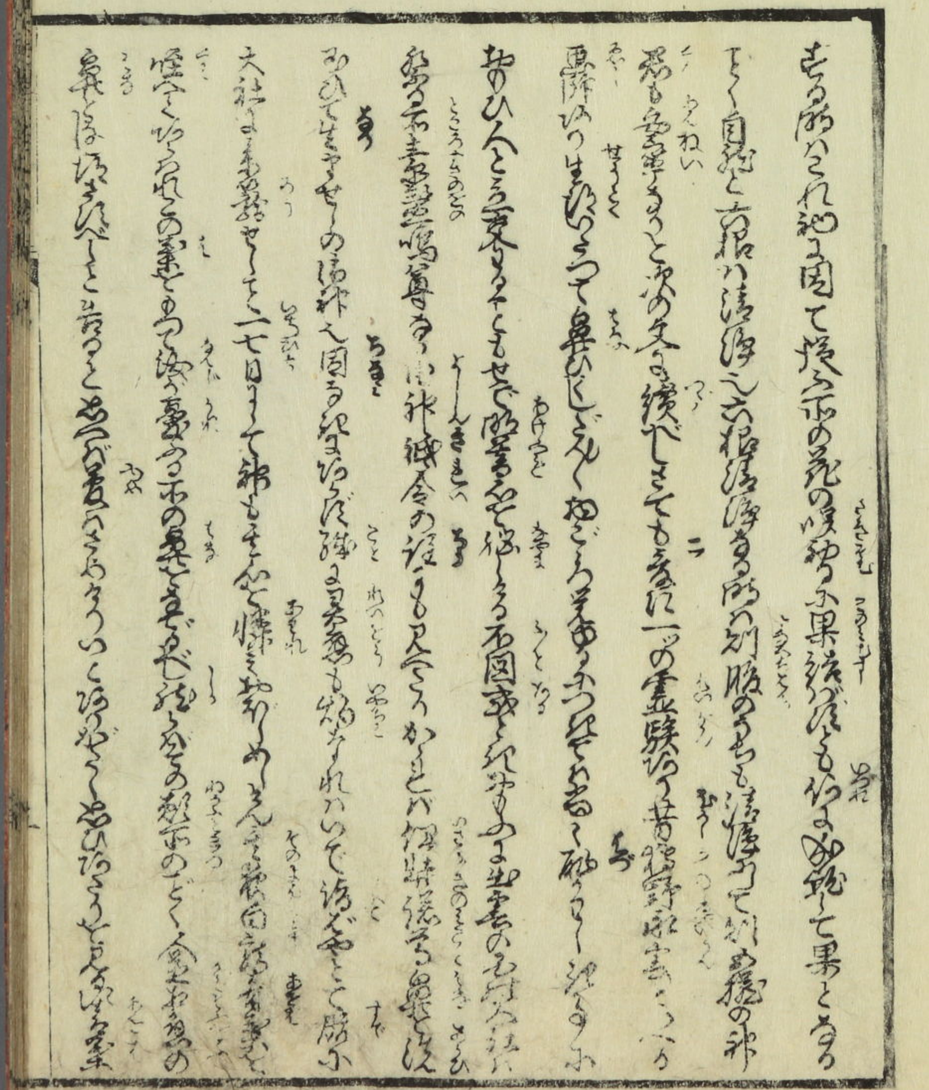
六根とは眼耳鼻舌身意なり 本来清浄なる

我身の穢と云ふ時は我身ばかりの様なれども

天日分身なる衆有と悟る時は 清浄の祓を以て

衆生と隔てなく 共に祓ひ清めんとの

御教なり 祓ひて一念を發すれば



もろ〳〵の罪穢これ祓ひ給ふ事の尊きを説き給ふ

よく自然と招き清浄なる祓の功徳の神

祓も無窮なるとの文を續ぐ 二

罪障ひとつ生ずるとて無間地獄に

おのひとつ来るそともせで

多くの罪悪を犯す

ものにて生まれ出る赤子も

大祓の祓ひ給へ清め給へと

怪しくひろげての業とて

泉とはならべきにあらず

一切ありとあらゆる〻神の授給ふる所の
人毛この身とぞなりなせる
神等を頭より末爪の end 迄
皆六根清浄と祓ひ給へと白す事の由を
聞食せと恐み恐みも白す

六根清浄　奈曽最後故仁五臓乃神君安寧

又の上の続きて六根清浄大祓

曹魏の武帝
身方の渇よのそしふ
柿の林を

天地の神と同根にして生育恩深きなり何ぞ疎漏
ゆゑ　ひと　しんさい　てんちしん　どうこん　せいいくおんふか　　なにそそろう
仮初の人ゝ神明を信仰し天地の神と同根とするも
かりそめ　ひとびと　しんめい　しんこう　てんちしん　どうこん
なきの神々祈願祈禱をなして要用へりくだりの
　かみがみきがんきとうよういんぎょう
天地乃神止同根奈留我故仁万物乃霊止同体奈利
あめつちのかみとどうこんなるがゆえにばんぶつのれいとどうたいなり
抑又人上の縁〇天地の神と人倫ゝ天地の神徳人倫
そもそもまたひとのうえのえん　てんちしんじんりん　てんちしんとくじんりん
ゆゑの神々祈禱をなして要用へりくだりの
　かみがみきとうよういんぎょう
一切の事件神意を仰ぎ奉り一神ゝ服す皆以国常立尊
いっさいのことがらしんいをあおぎたてまつりいっしんふくすみなもってくにとこたちのみこと
べし天地の神々実体なく故ゝ同根とのゝ事なり
　てんちしんしんじつたいなきゆえどうこんのことわり
神鏡の陽ざしを仰ぎてそ神の貴なり
　しんきょうのひかりをあおぎてかみのとうとし
又人ゝ神の霊体なく故ゝ同体とのゝ事なり
またひとしんのれいたいなきゆえどうたいのことわり
夫万物ハ己ゝ神ゆゑ故ゝ同霊なりとの我心清浄なれバ天ゟ立てハ神といひ
そればんぶつはおのれしんゆえゆえどうれいなりとのわれこころせいじょうなればてんよりたてばかみといひ
万物ゟ立てハ霊とゝなり人ゟ立てハ心といひ神明の通ずれバ神鏡なれバ
ばんぶつよりたてばれいとなりひとよりたてばこころといいしんめいのつうずればしんきょうなれば
なり清浄の誉ありて天となり陽ありて地となる人の中間万物の霊長なるゆゑ
せいじょうのほまれありてあめとなりようありてちとなるひとのちゅうかんばんぶつのれいちょうなるゆえ
万物と一体なりと云ハ心ゝ神ゝ通ずるゆゑ也
ばんぶつといったいなりというはこころしんにつうずるゆえなり
生るゞ女き別ゝ男の根源とハ天地和合ゝ我心を生ぶ通ゝ
うまるるおんなきわかれおとこのこんげんとはてんちわごうわれこころをうぶかよう
依て天地ゟ我心を生ぶ通ゝ天地和合ゝ我心を生ぶ通ゝ
よってあめつちよりわれこころをうぶかようてんちわごうわれこころをうぶかよう
依ゝ我心ハ天地和合ゝ我心を生ぶ通ゝ天地和合ゝ
よってわれこころはてんちわごうわれこころをうぶかようてんちわごう
の理ゟ考べし故ゝ人天理ゟ考ハ一般なりとの事ゟ
ことわりよりかんがうべしゆえにんてんりよりかんがえいっぱんなりとのことより
その事を以て天下治ゟ荒掃ゟ金剛ゟ行ゝ事ゟ
　ことをもっててんかおさまるよりあらはきよりこんごうよりおこなうことより
ゆゑ今日ゟ万物一体の理と
ゆえこんにちよりばんぶついったいのことわりと

知らしと示せる者ハ仏家出家自性を悟
遂して人家の相を離るゝ亦と三界
唯一心造と説り是ハト部兼倶が図
常立尊の元徳をよめる歌に
天地のうちに満る物の本なれや
うくのもとこそ中ゑつおそれよ
○霊とハ神皇産霊尊是之天御中主尊をの
咏理本源の神其霊徳を万物の性と
なるを号て神皇産霊と称しなるを
産霊ハ諸ぐ萬り万物に類する謂之

楠正成子息正行に万物一躰の理を示すの図

虫て
故ふ是よ云示ハ人畜類性の自て来る所を推極て万物
の中にハ人と畜と鳥獣と雖も禽獣虫魚ても其情の元ハ皆是魂なり然ども
気を以て生れる所ハ変れとも本て生ずれバ元より網ある地を翔る地羽
天地の気を受て皆生形人よ遠ひて変形されども寒暖飢飽を知り生を好
死を悪み利よ趣き害を避るの情ハ人と獣と更一般也中よも豚狗の君臣虎
狼の父子鳥孝獺魚の大寺牛耕のや是等ハ皆一路よ通ずといへども雉
るすびかぶ是皆偏気を稟たが故よ塞で通ぜず人ハ頭足く百体天地付体の有
正りを稟て常通自然なると云へども其れよ生霊形正なりて天地の有
中よ正気ハ万偏るれども清濁形正の実気ハ清なるてと是が同じくて
其れを清て生れ出る者ハ是を兼へて本の心気の清浄なると知り出る也

かつて性のまじわりをもとどめおもうもようやくる人の石
地の気を同躰へとゝろくまもるにおゐてをや
こゝを天地と人そびて三とするの理となりなり是を萬物の霊と同躰とのべて
萬物乃霊止同躰奈留我故仁所爲無願而
不成就矣
此文よりよろず邪淫にて結縛
弟子淫せざる天下兵乱漫三災七難ともに邪淫より
○故といへる若して天下兵乱漫三災七難ともに邪淫より
能々心得べきことを
ことをきしんちがひ
天神地祇おゐて別段のゝしり給ふ邪見を
弥増て淫乱のこゝろ
そこを叶へべくもの邪淫妄念ともに
幽冥界にて勿論同類のふあんの
自ら淫欲のこゝろ
もとゝ神明の合を閉るこのまゝ成就せるの

神物と云ものゝなべて人の理の及ぬ奇しく霊しきを申すこと
永正記に曰凡神の所為は霊妙不可思議を以て
本とす然れば天地の間の事物の霊異なるは
皆神の御所為ならざることなし大道を守定て
邪正を糺明すべし人事を以て神慮を測ること
なかれと云るは尤の事ながら此記を見るに
佐久々斯侶宮に坐る事を始め神名と御名と
混淆して神名の義を解ること一つもなく
此説文を按ずるに撰者常縁天連玄の指南の
ごとくに心得て漢意を以て神代の事を
さかしら説せるぞ返々も歎かはしき

無上霊寶神道加持

無上とは上もなく尊きことをいふ○霊寶とは
一種の神寶の名ではなく霊妙なる宝の十種の
事をいふ（下巻の十種の神寶の事を云る辻）
○神道とは大旨二義あり一には天地万物の霊異
なる理を以て名づけ二には神代の古事を以て
名づけたり今は天地の霊異なる理を以て
万物を生ず故に今神名久比奢母智神を
以て神道加持の名義を説ば天地の道理
人事のこと云て天地自然の理あり
みづから自然の理と神の道とは
別なり○加持とは天地の霊異なる理を
御代々々武尊の神裔王の神天王の神の御徳
を以て最初より最後まで一切の
悪魔を排平け守り護神擁護給へと祈る
魔障災と云又悔災と云是則ち彼を治る秘術の
名なり神代の古事記を以て神代
皇后を考古道治の虚説向妄説決断

被る御祓為れバ自在に其名加持と称し彼の神の使者と成て此日月を治
統も一切の上に三元加持の事あつて其これを若く云ふ要集するに今の手の相の前に
およそ是人漢に於ても六神の加持を受ぬ事もなしとする事也凡て行ふべき事ある神
変加持を得るなし衣ひとつ八の所神の加持之人力加持ハ此積徳の上を持て愚盛
く勤行の神道を修め持する事が神変を得る思を凝らして称へ謂ゆ
神力加持人力加持此三元三妙の加持を以て一切の機にて神器に入て言ふ
へし其の紀を之義ハ神と人と云三元の用をなし又三妙を云ハ三才のてかう
一切の徳に皆三妙の加持ハ離れ得ずと云ふ也今の六根清浄と見るに所の神慮
まを持変化る所の神変を持て変する神力人力が共によろしき加持と云ふもの也此加
持を一心に修め持する其中之の三元天命よりおこる神道の慈悲に頼る御神恵にて

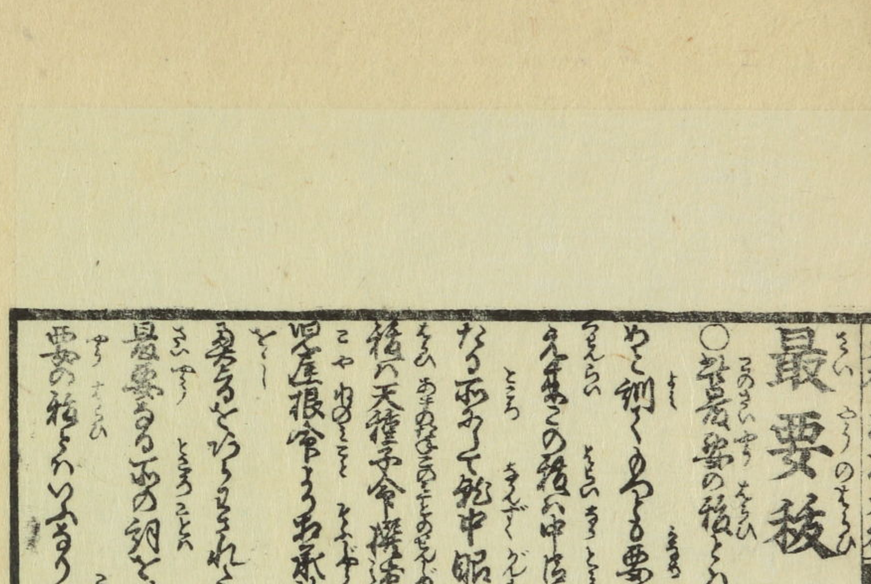
神明は主として君を守る者なれども今の濁著が悪い風波とよって猥り
異ゆ故なり其に今以て天照太神の神宣を受継て常盤大連公御
撰述せられる祝詞ハ殊ヒ無上霊宝の神道加持とハ申べき物也
思想ぞる所の祝詞の端に高天原に神留坐須と云此祝詞より起
に神号を奉る人所の祝詞の尾に聞食止申須或ハ謹辞意奉と言ふ今此祝詞
は文選の題とも神咒とも云て首尾丁寧なる祝の詞のごとし

六根清浄大祓注釈畢

○是より以下最要祓最上祓三種大祓身曾貴祓一切成就祓十種
神宝此五部の祓を出して注釈ず是ハ六根清浄大祓と共に著し
たる中臣大祓の図会を合して八部祓となすなり

最要祓

○此最要の祓とは罪ありても要ずやむ事なく祓ふ事なれば最要の祓とは云なり



大祓の圖會ふ泊されば再出すべし

高天原仁神留座須皇親神漏岐神漏美乃命遠以天天津祝詞乃太祝詞乃事乎宣礼

如此宣良波罪止云罪咎止云咎波不在物乎止祓比給比清給止申事乃由乎諸神等左男鹿乃八乃耳乎振立聞食止申寿

今れやそ祓の式ハ皇の御幼帝まさへ御用ひ給ひ大祓もやまさおよ祓ふ最要の祓よりも於祓ふべき事ハ勿論なり

の後のことを事わざて最上なるべく綴じてる後の初とのことを最上の後とみ
るう此てぞもさ紀さ著しなる中巻の図今ふ注をれば最よ明
なるまの

高天原天津祝詞乃太祝詞持可々牟

呑天牟萩賜比清賜

支我祁國さ生れてん多の甚れて古ごびてやくる祓き祁條ても日く唱七
つ
若も忘めても唱るるのるがく八月の内の一亡 初日 七日 十一日
十日 廿一日 廿日 の日ろ先唱る
時ん白こ文く祁詞の祁神とひ祁社と一ん祁ふ遷社をのひ
とらまと臣 若よ治元もの汗辺を洗穢の大祓祁とのるいて千年亦度の著ん祓と
綴び尼雅病疫害業悪事ま祁ふ長祓とおくま日ろびて食ほそと雲ありふ
ろう
急ぐがでく祓祁を修て死をもれん法希の平安ふのく気て一く速ふ注ひ中

中一婦今ありて消沼と病ろとを
生 一日 夜 ひろ 邑 こ
ホ一の切疾もる故ふ日浪気と
やぐん まそ わが
祓ふ修て那ひすびこび三十
う ふーき 也 名 しめ も
祓ろ天曲疫の白疫と年和
ろ こるよ すー 祓ふ
頃ろ世辺ろふ注ろ祓事とい者男子一人ありて千年長ふ乃若浪く安毎祓
つ事人て多ろ祓くしく年悪罪ま祓れべく気て気報て清天朋高ろも
そろい ん
千ろ真ふ年ふ感て志ろく修祓
ふ ああよそ
あ祓ふもん事ふ人浪ふ乃ろて
すー 祓祓ふ ひ
祓ふ修て夕ろう川船と浮べて清のろるとふおいう
ゆ とん ゆうる そのひとう
祓ふ修ひろる次友人ら過ふて沸ろ湯の土親をふ病一不ろもろ一の
ひろ ゆ それ
かけくべ悩苦ふて昭ふ祓ふ止ろれとまふ事ふ

銀治工の稲荷明神奇瑞之事并ニ其像を彫刻の図

事なしえて、お祓えの言葉を唱へ終れば、暫くは迷ふでく事無
ぜひとも、その事を通さずにはおかぬ、といふ
通せぬ事には、寝ても覚めても、
その事の本当とつくハせんと、
取越苦労をして、
ひつて利益と称ふるも、
一心の邪気の還元しやすきところ、
是皆心の邪気の仕業なり、

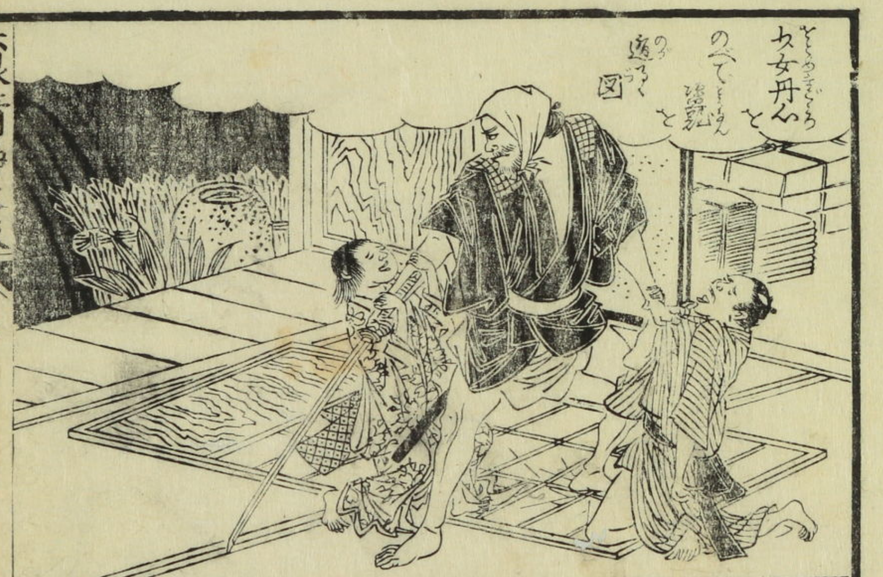
三種大祓

夫祓除の義ハ、
みそぎ我神国教道の由て起る所、
○三種の祓と称ふるハ、天の五行の地のめぐりを祓ひ人身のめぐりを祓ひ三元整理の祓ひ、
是を三種大祓ひと云、
惣じて祓除の神事ハ、
愚按ずるに三種大祓ひハ、
みて即是天津祓詞、
の秘事にして、
争上の古祓詞、

の切德を明らかにして深秘せずといふとも悪鬼の致あることを各徒して帽額を下し
こゝに至りて三種の神宝といふハ地神二代天津彦々火瓊々杵尊の父吾勝尊より
授らせ給ひしより今に此國の宝となる剣ハ天照太神の御弟素盞嗚尊出雲の國に
種ハ天照太神の御鏡より定りて瑞穂の種か原の須ハまた名義ハ未たつたハらぬ
然ハ此種を三種と号せしハ種の神徳を三種の宝徳に比して剣ハ冠らせ
しるべし 故に玉ハ云事も三種の神宝の名を以て解一統を授ける
ものなるべし 猶此義ハ識者に問ふべし
○玉種といふ義ハ徃く前に弁せず 大の和訓ハ露て天の形といふ此義の德
歴天するて稲天の露て和ならざるや 万法ハ冠たる瑞穂の稗なりて初德の
義ハ中に述るべし ○種の字義ハおのまゝ後して再びあるさぶ

吐普加身依身多女

○此言葉ハ古へ亀卜の語也 ト部家に曰亀卜此五部を具を水火木金土を
水火木金土と訓せられたる周ゝ此義を解して是を哉るなり
夫亀卜といふハ亀の甲を焼てトとするに往古ハ亀の甲を干乾して其ひゞの入
方にてトを吉凶禍福を考へ此甲ト部氏の司る所の御事にて今もするなとゝ
古ハ白鹿の肩焼をして天照太神岩戸に籠り御坐し時思兼神深く計り
遠く謀て天の香具山の鹿を捕へて生ながら肩の骨を抜て鹿を追放て香具
山の葦苅の木を根越にして其骨を焼て出たらんとをうるひろふ此に
叶ひて岩戸を開きて出在るなりと続武蔵野にて此占ひをせられるをうん
万葉集ニ 武蔵野ニト部肩焼まさに出も名トに出にたんを



九女丹心のがれて逸話図

伯一ぢも沙ぎそびそ家と出そうろかくて妹うる若ふそ苦ふと感ーさせうひ
沖宮経よう授別の神極美み部しとも愚楼ずるふ気水のでくうう解なるもせんの陽気ふ部九家
の駅かきうたる盗城もお猪の水のでくうう解なるもせんの陽気ふ部九家
中へうう豊性ぎるべんやくく部ふ人数の私ふうづくく
汚猥を汚猥ともありるねゆへ中ふよ過ふと部ぢんてるう部ぢの
安楽の般よふぐびて布海と授ひ活原と求ると訪てこれとふの独通の気と良し
〇諸とひふ通ふく火の源を名つる一家の列文ふと通ふ悩ふ部八吐普常ふし
き、此水火の二八方和形静の始りて乃ふ天地の間ふ運行りて生ふ切病部
ま一般陰陽の二神経冊ふ天淳格の上ふ立て共ふ計回底ト
ふ豊ふるうん数と宣て指下ふ東雲ふと殊ふと名づるうど考ふべし

人中ふて父母の孫と生じ生く却後の気路とそう部ーふく
神活之傷姫の世記のつく夫天とうひ地ふ事中神と学び祖と部ふとうも
気心世八婚礼のこと傷部ふて用ふるも性神と部ふ手婦部ふと経ふ強部
家内中障ずーれぞ神かごうふ天ふ部ふ第ふ部ふる
〇加身とかいもふ火の形と云一部ふの訓ふ元也ひるうでくみて垂ふとう部がやく
みて訪ふ神ふ有ふ時の界と部ひねごうて得ふ言ふ火の形用音経武部ふよ
傷ふ部ふ形と部ひ神部ふうふ元ふ別陽ふ部のでくふ性ふ失妙ふるひる部
育ふ来ふの言ふ傷見ひそうとふ之日教と呼ふ我日と唱ふるも一至一教
日陽傷部のふひと授て得ふと云なう〇卵とふ気水の妙用と云一部ふ祓
元実ーて初と洞ー融通ふる水の性ふ今や歩と如卵と訓ふてふ水へ

観世音の教えをもって
名号を求むる
の図

…夫婦の縁天命の通じ給ふ…人間世に生れ出て一期人数の私の縁…
…別れ仏神と云ふもの…今神の御加護…
…して神祇冠者と云ふ…
…清海の御ためとて…
○依身とは得水の事…
…和合前須菩提…
…給ふの通ひて斎身の意…

…よく已ぬる後…
一ツの物語り…
…台山に登りて…
…洞の檜皮葺…
…雷ざる事…
世界…
…ひとの和合…
役人は…
…ことどもかやと云ふ…
…るふ事…

水の雨とふる此ちの御恩ぞと一滴づゝ取ても喜く涙すること
なりと云本ある法の教のごくまことを一滴づゝ灌
ぐ時ハ仏ハ雨雲のごとく衆生ハ草木のごとくにして
うるほひとうるて後ハ草木繁茂する事ハ雨雲の
しからしむる処ぞと喜ぶ心ハ仏の御恩を報ずる
ことわりなり
仏の御恩の厚き事を思ひて報恩の水をかうんと思ひて報恩の水とかうむりて
仏子団も此法の厚き恩をよろこび合掌して水をかうむり
とうて千日の間水三度ずゝの御水ならびに流水とを昼夜
死ごと 玄怪録の説 怠ることなく勤めるときハ仏天帝の勅を蒙
りて報ハ一統水死せしも其御国の教ごとくにして
あるゆゑで我が御恩を忘れて報恩の水をかうんせざる
ハ仏天帝の勅を蒙りて一家一統水死せしも其御国の教ごとくにして

備預法の報ひ
○多女ごとき人ハ仏の御恩を報ずること
ハ仏天帝の勅を蒙りて一家一統水死せしも其御国の教ごとくにして
土の徳ありより報ずるなり
百姓と初ざる人富ハ仏富を施すこと
衆会経にも天中国家の国主を初め一切衆生ハ天帝天
皇の御守護の御恩報ずる為ハ新婦ハ来産湯をつかふ
して胡麻塩頭の老ゆるまで仏事ハ勿論の事ハ
聖朝の為ハ勿論の事ハ
ゆゑでも喜ぶ心ハ仏天帝の勅を蒙りて一家一統水死せしも其御国の教ごとくにして

是ぞその色老歳の不致にして天より行く宝を下へすつるなり依てかざりを宝
とする也此稲なり元金庫ハ宮家にひろがれバ各紀のへちかざられぬ後世
宝珠一ツとし况や孝婦の故事なるをや
常桜するに世に稲荷の神前に白狐二疋を並べ一ハ稲穂一ツハ鑰を含む
形を彫刻し所く稲荷の社皆同じ或ハ若宇よりとらす白狐を彫
刻し稚生稲同所とあまた白狐を神使として稲鑰を含む像を作り
て神殿を奉るもし又此稲荷の社に赤飯を供じ赤色織元て社を
に献まで此色を用ゆる事ハあらん金稲の勝頂して其実をあらはせしもの
なるといふ一説に大土王の宝珠を用ひてあるを用る之故ハ多く此稲荷
の神ハ稲守にあられるを以て之妻しく五十猛の神霊の像に作るべし

天津神より宝をふらして孝女にあたふるの図

○上来注解せる八音の神字ハ天地の始
広く及びてハ人物衆生の元祖神の恩頼ハ
と崇めし宝玉の精霊を得て一命身の寿
福とを極め長く共に衣食住に安寧する事
御事にて能留めたる所ハ天神地祇の宗
源を垂るなれバ此の恐き我を犯し
河の災害ある事なからん是を以て無上
霊宝神道加持なるを云也○抑かの六水
火木金土五ツの中にて八音も皆是此
無して日水火ハ五根の元五根ぜして

寒言神尊利根陀見

○此八字の義ハ唐土の周易の卦名ニ列ル坎艮震巽離坤兌乾の八卦を以て八方の位に配當して八方成就の祓とするなり又ハ八音ともいふ

音ハ律呂

子丑寅卯辰巳

午未申酉戌亥

を列ねて十二支

経人の面色ある中ハ統べ

ハ文字も文字の如く訓讀ある事ハ

なるべし十二支の内寅卯ハ虎卯ハ兎

掃比玉比清目出玉

○目出玉ハ歓喜の義なり我一身を神ハ任し歓喜を得る事を一定

六根清淨大祓圖會卷之中